

多様化する「時間価値」

現代人は、とかく「忙しい、時間がない」と言われるが、年間総労働時間数の推移を見ると、2025年の平均は1,621時間で、10年前の2015年と比べると100時間減った。(図表1)では、どうして「忙しい、時間がない」と感じるのか。

1つめに、「自分の自由になる物理的時間の減少」がある。共働き世帯の推移を見ると、10年前の2015年と比べると1.2倍に増えている。(図表1)

また、総務省の「社会生活基本調査」によると、「趣味・娯楽の時間」は2011年と2021年を比べると、男性は2倍に増えているが、女性は変わらない。

2つめに、「自由に感じる時間の減少」がある。たとえば、スマホに通知がやってくる、多くの情報の中から選択しなければならない、誰かがやっている自分もしなければならないと思うなど、「心理的な負荷(時間に追われる感覚)」が生まれやすい。

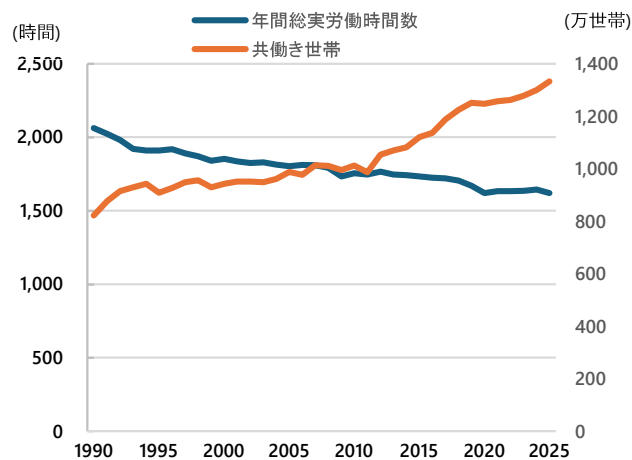
3つめに、時間の効率化ツールなどにより、実際にかかった「物理的」な時間より、「体感」で時間を感じるようになったことがある。たとえば映

画を動画配信サイトで見る場合、つまらなければ、スキップや倍速で見ることができる。逆に、スキップや倍速で見られないと、「非常に長い映画で無駄な時間をとられた」と感じてしまう。

このように、単純に「物理的時間」だけでなく、「体感時間」が、「時間の価値」を大きく左右するようになってきている。

「物理的時間を短縮化」するための商品・サービスは多くある。しかし、それだけでは、満足できる「時間価値」は得にくく、「体感時間の短縮」「体感時間の充実(短時間でも有意義に感じるなど)」が鍵になってきている。

■図表1 労働時間数と共働き世帯数の推移



出所：総務省「労働力調査」

そこで、本稿では、「物理的時間」だけでなく、「体感時間」から生み出される「価値」について、4つの事例とアンケート結果から、考察していく。

「体感時間が長い」と感じるのは、「面倒」「退屈」「不快」「不慣れ」といった時である。今回取り上げた4つの事例では、このような「体感時間を短縮」し、さらに「新たな価値時間」を生み出している。

『伊藤忠食品 凍眠フルーツ』…食べるまでのひと手間を無くし、国産の旬の果物をいつでも手軽に食べることができる「彩りのある食生活時間」に。

『ヤーマン リフトロジー』…継続がしづらかったリフトケアを「置くだけ半顔1分」で、「おうちでのリラックス時間」に。

『花王 クイックル洗面ボウルクリーナー』…気になるが、毎日できなかったそうじを簡単にできるようにすることで「気持ちの良い洗面時間」に。

『TOTO ネオレスト』…面倒なトイレそうじを減らし、「いつもクリーンで快適なレスト時間」に。

ITの進展などによって、物理的時間はさらに短縮していく。その分、生まれた時間をどうするか、それを、どのような価値ある時間に転換するかは、各生活者による。ますます「時間価値」は多様化していく。今後も、注意深く見守り、研究していきたい。

■図表2 「物理的時間と体感時間」、そして、「時間短縮」により生まれた「新たに生まれた時間価値」

